

2024年4月7日(日)
中国新聞SELECT掲載



ウガンダ
(2021~23年)
横山穂佳さん(26)
名古屋市

私は2021年12月から23年12月までの2年間、アフリカにあるウガンダのカサンダ県という場所で、JICA海外協力隊員として活動した。

私は派遣期間中、任地のカサンダ県でエボラ出血熱が発見されたため、首都カンパラにしばらく退避することになった。その時に、ストリートチルドレンの保護施設で活動していた他の

たくさんのことを考えさせられた。その一つに、ストリートチルドレンの保護施設での子どもたちとの出会いがある。

保護施設の生活最善か

日本と環境も文化も価値観も全く異なるウガンダで

私は、保護施設で暮らす約300人の子どもが暮らしている。私たちはその施設で、子どもたちにサッカーなどを指導したり、アルファベットを教えたり

した。楽しさを届けようと試行錯誤していた。しかし、そんな隊員の手伝いをするに至ったのだ。施設には路上で物乞いをしているところを保護された、2~16歳の

ある日、私たちに想像していかつた知らせが舞い込んできた。それは、子どもたちに想像していかつた知らせが舞い込んできた。それは、子どもたちに想像していかつた知らせが舞い込んできた。

私は、保護施設で暮らす約300人の子どもが暮らしている。私たちはその施設で、子どもたちにサッカーなどを指導したり、アルファベットを教えたり



保護施設を訪れて子どもたちとの再会を
喜ぶ横山さん (後列左端)

約300人の子どもが暮らしている。私たちはその施設で、子どもたちにサッカーなどを指導したり、アルファベットを教えたりした。楽しさを届けようと試行錯誤していた。確かに施設での暮らしはいい暮らしとは到底いえないものの、一度寝る場所は確保されてしまう。しかし、彼女たちにとっては、突然路上から連れこられて家族から引き離され、まるで監獄に入れられたような生活だったのだ。

私は、保護施設で暮らす約300人の子どもが暮らしている。私たちはその後、スラム街で笑顔の彼女たちと再会した。今でもたまに考える。彼女たちにとつての「最善」とは何なのか。何をするのが彼女たちにとっての助けなのか。何もしない方がよかつたと思うこともないわけではない。